

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494

沖繩に次いで米軍基地の多い神奈川県に住んでいる私にとって、核の問題は魚の骨が喉仏に突き刺さっているように常に意識の底にある重大な問題である。

## 死の灰のちいさな小瓶

高井 礼子

なっていた私と新井さんが行くことになった。焼津に行く前に船を見たいと言っていた。独特な型をした展示館は本や資料の写真で見ていたので迷わずに辿り着くことが出来た。初めて福竜丸を見る私の胸は高鳴っていたが、まずは「沈めてよいか第五福竜丸」の朝日新聞の拡大コピーの前に足を止めた。

うに空から舞い降りて船員の体に付着して全身に痛みが走り、白い粉を鼻から吸い込んだために細胞が犯され白血球が減少して次第に衰えてゆく人間の姿がまさまじと浮び耐え難かった。然しこの現実から目を外らす訳には行かない。福竜丸には現在もこの地球上で行われている核実験のグラフが鮮明に描かれていた。今年のピキニデーで、ピキニの水爆実験ですぐ近くのロンゲラップ島民が「人体実験」のモルモットにされたと言ふ島民の声を聞いて来た。

## 新年度事業計画、予算を決定 協会理事会

三月二十九日、学士会館で協会の第一〇〇回理事会がひらかれ、一九九五年度の事業計画と予算を決定しました。

### 見学校の作文から

●草加市小山小学校六年生 佐藤杏里さん

学校の社会科見学で展示館を訪ねました。第五福竜丸のお話を聞きました。水爆の恐ろしさは以前から知っていましたが、お話を聞き一層恐怖を感じました。

●三郷市さつき小学校六年生 田村江梨さん

「えっ、こんな小さな建物の中に船が入っているの？」と私は目を丸くしておどろいた。けれど中に入ると大きな船が小さな建物の中にめいっばい入っているのが目に飛びこんで来た。この船がなぜこんな所にあるのかは分からなかったが、船を見た瞬間に心を打つ何が胸に迫ってきた。

展示物に一つの詩があった。五年生の女の子の書いた詩だった。

「よしこちゃんかまと私が食べたいとすねたのでお母さんが買いたかった。その間によしこちゃんには死んじゃった。お母さんは、お母さんばかりたべさせて死なせちゃったね。と泣いて泣いた。わたしも泣いた。」

### 都の広報に展示館

東京都の広報誌「とうきょう広報」の三月号が表紙裏の一面をさいて第五福竜丸を紹介。都内の記念館や名所を紹介する「あなたのまち再発見！」の頁で、「平和への願いをこめて」の見出しで、館内外の写真、展示の趣旨、ピキニ事件の解説など簡明に書かれています。春休み、広報で見たと家族連れの来館が多く見られました。

さて三月九日、いよいよ集団での見学日である。あらかじめ展示物の説明をと依頼しておいたので、館の方が実に丁寧な心に響く静かな語り口で、被爆の実態や被災者の苦悩を、そして更に現在もこの地球上にある核の不安について語って頂いた。余りにも熱心に質問して長時間の案内に恐縮しながらも、船内まで限らず説明をして頂き誰もがただただ驚異の声を挙げつつ学ばせて頂いたことに後日みな感謝の意を持って頂きたいと思う。

核兵器と科学者

原爆開発の興奮と痛恨 (3)

核分裂発見の驚きと衝撃

小川 岩雄

連載 4

一九三五年頃から、ドイツ、ベルリン郊外のダーレムにあったカイザー・ウィルヘルム研究所の放射化学研究室で、ノーベル賞受賞者である濃厚な化学者オットー・ハーン博士は、中堅の助手フリッツ・シュトラスマンとともに、ウランに遅い中性子をあてるとどういう元素ができるかを注意深く調べていたが、三八年頃驚くべき実験結果に遭遇した。

つまり、核反応生成物の中に何と原子核の目方がウランの半分位に過ぎない元素であるバリウムだとかかと思えない放射性元素が相当量存在することが、はっきりと認められたのである。もしこれが本当だとすれば、これは全く珍しい現象であると言わねばならない。というの、従来知られていない核反応では、生成される原子核はすべて質量も電荷も反応前の原子核にごく近いものばかりであったからである。これは例えば紅茶茶碗(わん)に何かがぶつかったとき、普通は把手(とって)が取れたり、

縁が欠けたりする位で、景気良く真二つに割れたりすることはめったにないのと似ている。

ハーン博士らは分析の正確さについては確信しながらも、一体こんな異常な現象が本当にあり得ることなのか、その解釈について何日も深刻に考えあぐんだ。そして結局博士は彼が最も信頼する一九〇七年以来の共同研究者であった女性物理学者リーゼ・マイトナー博士に何度も手紙を書き、意見を求めたのである。

彼女はオーストリア出身のユダヤ人で、二十年以上ドイツに滞在していたが、一九三八年二月、ヒトラーが母国を併合した結果身に危険が迫り、期限切れの旅券を手に辛うじてオランダに脱出、スウェーデンに移住していた。

ハーンの実験結果を目を見張った彼女は、クリスマス休暇で訪ねてきた甥の物理学者オットー・フリッシュ博士と二人で野山を散歩しながらいろいろ考え抜いた末、もし重い原子核は先に量子力学の

父ニールス・ボーアが提唱した通り、水滴のように自由に変形できるものならば、ウラン核が二つの部分にちぎれる分裂現象だと認める他はないとの結論に達した。そしてその時、非常に大きなエネルギーが八余りV、それらの破片は勢いよく飛び散るだろうとフリッシュ博士は予想し、まもなく実証することができた。

この発見はたちまち世界中に伝わり、学界を学問的興奮に巻き込んだ。しかしアメリカでこのニュースを聞いたシラー博士など、科学者の多くは、全く別の観点から深刻な衝撃を受けずにはいられなかった。それはこの核反応が、それまでほとんど不可能と思われていた核エネルギーの解放を、突然実現可能にするに違いないとすぐに気付いたからだ。

なぜなら、核分裂で分かれた破片には中性子が過剰に含まれるため、恐らくそれぞれ中性子を二個放出して安定核に近づくと予想されるからである。これはまさにシラー博士らが永らく夢見てきた連鎖反応がウランでは起こり得ることを暗示している。この予想はまもなくフランスのジョリオ・キュリー博士ら、続いてフェルミ、シラー博士ら、続いでフェルミ、

核エネルギーの解放が遂に目前に――、だがこの「朗報」も、シラー博士らナチスやファシストの厳しい迫害を逃れてヨーロッパから米国に亡命してきた科学者たちは、底知れぬ不安と恐怖を呼び起こす不吉な予兆と受け取らずにはいられなかった。

それもその筈、第一次世界大戦での敗北でベルサイユ条約により巨額の賠償金を課せられたドイツでは、経済的困難を背景に、条約破棄とゲルマン民族の支配、反共などを掲げたヒトラーのナチス党が財界、軍部の支持で急速に進出し、一九三三年事実上独裁体制を確立した。イタリアでもファシスト党が政権を取り、両国で露骨なユダヤ人迫害と反ファシズム知識人などの弾圧が始まった。ユダヤ人科学者は次々に職を失い、ドイツでは十数人のノーベル賞級学者を含む千六百人もの物理学者が外国に亡命する羽目になった。

世界制覇を目指す国、しかも物理学の最先進国で、核兵器の原理となる核分裂反応が発見されたとなると――、シラー博士らの深刻な心配は充分に理解できる。(立教大学名誉教授・協会理事)



あわて幕やぶけ芝居 ― 東京空襲3・10 ― (中央筆者)

最近思うこと、人びとが世の中の事に対して無関心の度合いが強いように思う。その事を利用してバスや電車の中でも感じとれるし、政治に対する無関心は益々拍車をかけている。小心者のぼくにさえ、その気持ちにはびこってくる。

ぼくは仕事で岡山へ行くため、一月十七日の早朝東京駅に行った。大阪方面新幹線不通の案内。仕方なくいったん部屋に戻りテレビのスイッチを捻ると無惨な映像が飛

演劇と平和と……

林 邦明

び込んで来た。しかしその時もやはりぼくは無関心派のひとりの感情で画面をみつめていたのかも知れない。ぼくの頭の中にある事は岡山へ行く事は諦めて九州(福岡)へ行くための航空券の手配で一杯であった。その日の夕方、羽田から福岡へ飛び立った。

神戸の地震の被害が報道されその実態が明らかにされぼくは無関心ではいられなくなった。燃え狂う火災の映像はぼくには強烈だった。被災地の実情が報道されて行くうちに、多くの人たちの善意が動きだした。この事にぼくは人間の誇りを感じた。それはテレビ局が美談的につくり上げたものとして人間の持つ優しさにはかわりはないと思うからだ。(世の中が平和だと、無関心な状態になるのだろうか。本当はその事が本質ではないのだろうか。)

今回の震災で報道関係者の多くが火災の焼け跡を見て、空襲をおもわせる光景だと、感想を述べている。ぼく自身も記録写真とあの

焼け跡の映像がまったく類似している事に驚かされ、その関連から昨年再演した「あわて幕やぶけ芝居、東京空襲三・一〇」が思いうかぶ。焦土と化した本所、深川地区その様は筆舌につくせぬ内容だった。

ぼくたちがこの作品を江東文化センターで上演したのが一九八七年三月。この作品を江東の地で上演活動を行いたいという熱い思いと、東京空襲三・一〇集会を毎年推進していらした東京都教職員組合江東支部の高岡岑郷先生(現東京都教職員組合執行委員長)や多くの人たちとの出会いの中で公演の成功に結びつけることが出来た。

その普及活動の中で第五福竜丸展示館の三尾香英さんとの出会いがあり、この地へ第五福竜丸が展示されるに至った経緯を知りびっくりしたもので、三尾さんの穏やかな口調で船内に案内され、ここで聴く音楽は(もちろんクラシックだろうか?)なんとも言えず荘重さを感じると、いうような事をおっしゃったのが今でも印象に残っている(それ以来公演案内をする度に観劇して下さるのには感謝しています)。

第五福竜丸が死の灰の洗礼を受

けたのだぼくの十歳の年、その頃水爆実験のニュースが世間を騒がせていたのを子供心におぼえている。その後、この事は大きく社会問題となり映画や文学と様々なメディアでも紹介され演劇でも舞台化された。その第五福竜丸との出会いは、例えばは良くないかもしれないが、ぼくが演劇の世界に入ってテレビ局のスタジオであの憧れの吉永小百合さんと会った時のような新鮮な驚きと感動だった。

しかも多くの人たちの呼びかけで保存運動が起った話にも感動が増幅され、人びとの心の優しさ、平和への思いが胸を熱くした。不思議な事に日本の高度経済成長をめざした時期に生まれた夢の島で発見保存されている事にもなにより因縁めいたものを感じる。

今年戦後五十周年、ぼくたちの劇団では記念公演として、四月に田宮虎彦原作「花」の舞台化。この作品は第二次大戦中花の栽培に反対されながらも花をつくり続けた女性の生き方が描かれている。九月には昨年TBSテレビで所ジョージ主演でテレビドラマとしてリメイクされた名作「私は貝になりたい」の上演の企画。演劇を通して平和のあり方を問い続けて行ければと思う。(東京芸術座)